

## 23. シャトルアラブ川

運河ではありませんが、船舶が航行する川についてお話ししましょう。古代史を学べば必ずでてくるメソポタミア文明とかクレセント文明ですが、メソポタミアは地名、クレセントは三日月で川の流域が三日月型になっていることに由来します。



①

古代文明発祥の地は大河に沿ったところが多いのですが、このメソポタミア文明も例外ではなく、チグリス川とユーフラテス川の二つの大河に挟まれた広大な湿地帯がメソポタミア地方で豊かな自然に恵まれておりますが、大河の沿岸から離れると赤ずんだ岩肌の荒涼とした大地か砂漠で雨はほとんど降りません。では何故大河があるのだと疑問を持つでしょうが、水源は遠く離れたトルコのアナトリア高原で、ここは雨量が多いのです。二つの大河の水源はこの山中でチグリス川はイラク領内を流れます。ユーフラテス川はシリア領内を流れてからイラク領内に入ります。やがてこの二つの大河は合流して一つの大河になり川の名はシャトルアラブ川となってペルシャ湾に注ぎます。

このシャトルアラブ川が今回のテーマです。我が国ではあまり知られてない川だと思いますが、この川こそがイラン・イラクの対立の原点であり、イラク・クウェートの対立でもあったのです。

古代文明時代から歴代の王国はメソポタミア地方だけに限定されていたのです。何故なら合流地点からペルシャ湾に注ぐまでは人を寄せ付けない全くの砂漠地帯であり、世界一の高温地帯でもあったからなのです。ただし海のシルクロードとしてペルシャ湾からこの川を利用してダウ船が往来していたようです。このダウ船はラテンセールの小さな帆船ですが現在でもペルシャ湾内を航走しているのを時々見掛け、乗っている人達も古代からの白い民族服ですからアラビアンナイトの時代と同じ風景でしょう。

ところが近代から現代になると経済活動の中で海運が重要な役割を担うようになりまし。第二次大戦まではイギリスがこの地域を支配していましたから海運はイギリスの独占でした。ところが戦後は多数の独立国が誕生し、それぞれの国が経済活動を行えば当然自国が支配する貿易港を必要となります。特にイラクの様に直接海に接していない国は何とかして海に出る方策を考えるでしょう。それがシャトルアラブ川の活用です。即ち合流地点からやや下流にバスラという街がありバクダットに次ぐ大都会です。古くから穀物や交易品の集積地だったのです。そこでイラクはこのバスラの市街地からやや下流の河岸を長大な岸壁に作り替え、イラクで唯一の国際貿易港を創り上げたのです。ところが問題はこの川がイラクと

イランの国境なので、イランもバスラよりやや下流域の対岸にホラムシャハルという街がありその下流にやはり国際貿易港をつくりあげました。さらにその下流域にはアーバーダーンに石油コンビナートを造り上げました。そしてこの河口付近にはイラン海軍の基地があり、もう一方の対岸はクウェートですから、利害が複雑に絡み合う三国がうまく付き合う訳がありません。ついに火を噴いたのが1980年9月22日～1988年8月20日、8年続いたイラン・イラク戦争、国連の調停でやっと停戦になりました。続いて1991年8月2日～1992年

2月28日の湾岸戦争、これはイラク軍がクウェートに一方的に侵攻し、僅かな軍備しかなかったクウェートはアッという間に占拠され、イラクの圧勝と思われたのですが、アメリカ軍を中心として30ヶ国以上の多国籍軍が集結してクウェートを包囲、一方イラク本国へも空爆やミサイル攻撃を



②

繰り返し、アメリカではこの戦争をニンテンドー・ウォー（任天堂戦争）と呼んでおり、これは的確に命中するミサイル攻撃や空爆がテレビゲームの様だと感じ、当時世界最高のゲームソフトの開発会社だった任天堂の名をもじってこう呼んだようです。この時は人間の盾事件や油田の爆破事件、ペルシャ湾への重油の流失事件等々未だ記憶にある事件が数多くありました。包囲されたクウェートから脱出しようとしたイラク軍と先回りして待ちかまえていたアメリカ機甲師団との間の戦闘は凄まじいものだったようです。

戦争が終決してから海運も再開されてクウェートを訪れたのですが、これは噂話で真偽のほどは判りませんが、最初にクウェートへ攻め込んできたのはイラク軍のうち大統領直属部隊でしたが、多国籍軍が集結始めた時点で、直属部隊はさっつさと引き上げ始め最期まで残されていた部隊はイラクへ出稼ぎにきていた近隣諸国の労働者達を兵士に仕立てた部隊だと言うことで、退却時の損害は大きく戦死者の数も全く判らなく単に十万以上とだけ言われており、イラク政府は何も発表しておりません。

血生臭い話ばかりになりましたが、ともかくこのシャトルアラブ川に関してはオスマン帝国時代から紛争の連続ですから数世紀続いていることになります。

さて本題に入りましょう。このシャトルアラブ川の名は国際地理協会に登録されている川の名ですが、イラクではシャッタラアラブ川、イランではアルブアンド川と呼んでいます。河口からバスラ迄は約200km 砂漠の中を曲がりくねって流れております。河口付近には大きな三角州があり支流が無数に出来ておりますが、船舶の航路は浚渫して運河のようになっています。河口は遡航する場合左舷側はクウェート、右舷側がイランですが、パイロットはイラク人でした。デルタ地帯を通りすぎると川幅が約800mもある大河に入ります。平坦な砂漠地帯を流れる川ですからほとんど流れはありません。右舷側にイラン海軍の基地があり300トン位の哨戒艇や100トン位のガンボートが舳つておりました。

更に遡航すると全くの砂漠地帯で一望千里人家はないどころか草木もありません。遙か彼方に砂漠の中を真横に動く大型貨物船が望見でき、これは川が大きく蛇行するので真横に見える珍しい光景です。

やがて右岸に緑が増え始めとイラン最大の工業都市アーバーダーンの石油コンビナートのパイプラインが縦横にあり巨大なタンクが列んでいます。3隻の大型タンカーが横付けして荷役をしていましたから岸壁も相当大きなものです。

更に進むとイラン最大の国際貿易港であるホラムシャハル市で川に沿った岸壁は30隻の大型貨物船が同時に荷役出来るのですから壮観です。この港の上流にカールーン川が本川との合流点があります。この川はイランのザグロス山脈を水源としてイラン平原を流れる同国最大の川で、平原の中央にあるアフワース市迄遡航できる大河ですからホラムシャハル市から合流域辺りまでは人家が続き、工場も数多くありました。

左舷側はイラクですが、こちらは全く人家はなくナツメ椰子の林が続き、土手には防風林なのか夾竹桃が延々と続いております。そして右舷のイラン側の人家がまばらになり、やがて砂漠になると、反対舷の左舷側にナツメ椰子の林の間に畑作の農地があると、土で造った人家も見えてきます。歴史の教科書に記載されている日干しレンガで造った家で古代から続く家の建築ですが、砂漠から



③

から吹いてくる熱風から身を守るには日干しレンガを積み重ねて造った厚い土の壁が防いでくれて中は涼しく最適なのです。まさに古代から続く生活の知恵です。灌漑用の水路があると農地も広がり農家が数多く見えてくると、幹線道路も見えてきてトラックが走っているのを視ると人間社会に戻ってきたようなホットした気分になりますから不思議です。やがて人家が多くなると荷役中の貨物船が多数舫っているのが見えてき税関のボートが近づいてくるとやっとバスラ入港で河口からの所要時間約13時間です。

このバスラ市の近郊に陸上自衛隊の部隊がイラク支援のために活動していたことがありますが、私が寄港したのはそれよりもずーと以前のことです。バスラ市はバクダットに次ぐ大都市で古代から交易地として栄え、イラク国内では外航船が入港出来る唯一の貿易港です。更に近郊の砂漠地帯には西クルナ油田があり、クウェートとの国境にまたがってルメイラ油田があって、この領有権を巡って争いがり、湾岸戦争の引き金になっております。

バスラ市とクウェート市を結ぶ幹線道路がありますが、全くの砂漠の中の道路ですから唯一の道路であり、湾岸戦争の末期、撤退するイラク軍と待ち構えていた多国籍軍との間で激しい戦闘があったのもこの幹線道路です。そしてこの幹線道路沿いに油田の井戸が多数あり、この井戸が燃え上がっている映像が何度も放映されましたから記憶されているでしょう。

湾岸戦争前ですが、私もこの道路を走って掘削している現場にアメリカ製の部品を届けに

行ったことがあります。砂漠の中で炎天下働いている技術者や労働者の皆さんには頭が下がります。気温は50℃、仕事着は寒冷地で働くような服装でこれは防寒着ではなく目だけが出ている防暑着です。これは体温36℃を護るため外気温を遮断するための方策で、我々の感覚で暑いから裸になろうとしたら、全身火傷の症状となり生命の危険です。私も皮の手袋をし防寒着を着て出かけましたが、いくら暑くとも汗は全くかきません。私達の感覚では汗水垂らしてとか、汗がタラタラとかくものと思っていますが、砂漠は湿度十数%との乾燥地帯ですから汗は毛穴から出た瞬間蒸発してしまいますから実際は大量に汗をかいているのですが肌はなんにも感じなく、その点はいい感じ。小水も回数が極端に少なくなり、最初は病気になったのかと不安になったくらいです。

現地採用の労務者の人達の服装はアラビアのロレンス風スタイルで目が出ているだけの厚着で、頭は大きな頭巾で覆っておりこれは直射日光ともの凄い土埃を防ぐためです。そして水分の補給は欠かせません。イラクは川水を浄水して飲料水にしていますが、川のないクウェートは海水を浄化して飲料水にしており貴重品です。

この砂漠の中での走行は、太陽の直射日光で砂漠が熱せられ上昇気流がもの凄く乾ききった大地の土塵を吹き上げ、視界は極端に落ちライトを点灯してノロノロ運転です。また太陽も土埃で霞んで見える位で、映画アラビアのロレンスでも1シーンありました。岩肌の大地的部分は道路からはみ出しても大丈夫ですが、砂漠の砂の部分では道路から外れると他の車に牽引してもらわないと単独での脱出は無理です。



水分の全くない砂漠にも小さな蠅のようなものが飛んでいたり、30cm位の蛇や蜥蜴のような生物がいたり、植物も存在します。これは米俵位の大きさに赤茶けたツタが絡みあったようなもので外面に大きな棘のようなものが出ています。そして風が吹くまま転がっていく文字通りの根無し草ですが、この大きな棘が根でここから水分を補給するのだそうです。全く水分の無い砂漠に夜明けから朝日が昇る2~3時間位の間、突如砂漠の表面を水が流れるくらい豊富な水が出現します。これは昼間の気温は50℃になっても夜間は20℃台に下がり、夜明けは15℃位になります。そうすると幾ら乾燥地帯といっても湿度はありますから極端な温度差によってツユができ砂漠の水源となり、生物は一斉に飛び出して一日分の水分を補給し、同時に生存競争を闘う弱肉強食の修羅場となる時でもあるのです。地球は広い、生物はいかなる環境でも力強く生きています。これは実感です。

#### 写真解説

- ① イラク唯一の国際貿易港バスラ港、シャトルアラブ川の川岸に長大な岸壁があり、数多くの船舶が荷役をしております。対岸はイランで人家はありません。

- ② シヤトルアラブ川の河口付近のデルタ地帯で座礁し朽ち張ってた貨物船。
- ③ 湾岸戦争の時の焼けこげた戦車が道路脇に放置されています。
- ④ 油田地帯でガスの放出、至る所にあります。

